



TITLE:

我が半生 : 停年退官にのぞんで

AUTHOR(S):

杉山, 産七

CITATION:

杉山, 産七. 我が半生 : 停年退官にのぞんで. ドイツ文学研究 1966, 14: 73-88

ISSUE DATE:

1966-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184902>

RIGHT:

我が半生

—停年退官にのぞんで—

杉 山 産 七

ドイツ語を習うことになったのは一九二〇年（大正九年）の秋、第四高等学校（文科乙類）に入学した時からである。その頃まで私は中学校では英語を習ったばかりだから、ドイツ語なるものに関心はなかった。四高の合格通知を受け取った時、英語志望の甲類から乙類へ編入されていたから、入学をことわり翌年受験しなおしたらどうかと、中学校の先生の意見を尋ねにいった。その時先生はどういう風な話を私にされたか忘れてしまったが、新しく習いはじめるドイツ語には格別の興味をそえられることもなく入学料をおさめた。

四高でドイツ語を私たちに教えられたのは、ドイツ人ヴォールファルトさんのほかに、木村謹治、新関良三の両先生であった。木村先生は、たけが高く、髪は黒く、重厚謹厳な風采を具えられ、新関先生は、たけ低く、肩はいかり、髪はあまり長からず前者との対照が著しかったが、生徒たちの間では、おふたりとも優れた学者であるとのうわさが伝わっており、一同神妙に授業を受けていた。おふたりとも教室では講義以外には、雑談をされることも、教訓を垂れることもなかったが、木村先生からはウパニシャットの講話をうけたまわった

記憶がある。

四高を卒業するまでの間に授業を受けた先生は、野村行一（故人）、高橋禎二（故人）、湯浅温（故人）、大塚岸三の諸氏であったが、この中では野村先生には最も長い間教わったと思う。先生は東北出身の木村さんに劣ることのない紳士で、丈高く、色白く、清純な上品なアトモスフーレが教室にただようた。その後四高から学習院へ移られ、さらに東宮太夫として現在の皇太子を長い年月輔導されたはずである。先生と同じ在所を郷里とした同級の中野重治は、在学中は先生に特別の世話になったはずであり、野村先生らしく思える人物は、彼の小説の中にしばしば現れておる。（付言—中野重治の小説「歌のわかれ」は彼の四高時代の学生生活がえがかれておるがその中には私らしいものが一人あらわれるように思われる）

一九二三年（大正十二年）の春、私は四高を卒業し、東京帝国大学文学部に入学してドイツ文学を専攻することとなった。ドイツ文学を選んだ理由を今思い返してみると、慎重な考慮と確実な決意によるものとも言えなかった。高等学校時代に不勉強だった私に興味あるものと云えば、小説などを読むことであり、学科の中で好きなものはドイツ語くらいであり、将来きつとなにに成ってみせるぞのような覚悟も出来ていなかった。その頃私の郷里富山市から一高や四高へ入学した私の友人たちを誘っていわゆる同人雑誌を発行していて、私は短かい文章を時々発表していたが、写実的な描写にもゆきづまりを感じ、清新な人生観にもとづく希望や理想に魂を燃やす熱情にも欠けていた。一言にして云えば、私は自分の才能にも信頼を抱くことも出来ず、少年にしてもう悒鬱な灰色の人生を送りつつあった。

私の性分のひとつを反省すると、生活の更新に対する恐怖心というべき性質がある。郷里富山市で貧寒な生活を送り、金沢では放漫な学生生活をすごした私は、東京という膨大な都会に対して、そこへ行かぬ先から、一種の不安におびえていた。新しい大都会に順応できないことは、私の生活の秩序を乱し、ふるえる心のさびしさ、

不安感は落着いて勉学にはげみたいという心をむしばんで来る。そして不勉強は後悔のしもととなって、一層私を苦しめるわけである。私は下落合の操業を廃止した工場の空き家の一室から赤門まで通学したが、たよりない心ばそさにおののきつづけていた。同時に東大に入学した、同郷の、上述の雑誌の同人のうち、Nや大間知篤三らは、革命的思想の洗礼を受けて、社会活動をはじめた（中野重治は、一、二年おくれて東大文学部に入学したのであったが、最後の金沢時代に新しい社会の理想に向って邁進しつつあった）。私はそれらの親友たちの転回に同調する勇氣を持たなかった。

その年の九月一日に関東地方に地震が起って東京市を破壊し、東大もほとんど全校舎が潰滅することとなった。私は十一月、東京と東大とを去って京都帝国大学文学部へ転学した。田舎出の青年が、混沌たる大都会の大きさに圧倒されて規制できぬ自己を、より小さい都市へ移ることによってとりもどし、ささやかな安心を得たいと云うはかない希望を抱いてのことであつたらう。

当時東大文学部には上田整次氏が健在で、助教授には青木昌吉氏がいた。私は上田さんの顔をついに拝見しなかったが、青木さんにはグリンバルツァの *König Ottokars Glück und Ende* の講読を受けたように思う。上智大学から来ていたドイツ人の先生の文学史の時間にも出席したが、その年はドイツ文学科には特に多勢の学生が入学し、未曾有の盛況を迎えつつあったらしく、教室では三、四十の座席がほとんど満員に近かつたように思うが、同級生と親しく知り合うこともなく、新しい友人を得ることもなくして、東京を去ることになった。

東京に比べれば人通りもよほど少い四條通りを静かに歩いた頃は、秋ももうたけて北山しぐれが底冷えの寒さを伴って訪れる頃だった。京都帝国大学文学部文学科ドイツ語専攻クラスには、上級生はひとりも居らず、その年入学した同級生は五人であつた。ドイツ人ヘルフリチュさんと片山正雄さんとは第三高等学校から来て授業さ

れ、藤代禎輔先生が教授としてファウストを講ぜられていた。成瀬無極先生は助教授として外遊中であつた。ヘルフリチュさんからはドイツ語作文を習い、片山さんはラオーコオンを読んでもくれた。

教室に出るとズツクの袍を肩にかけた学生の姿が目に入った。同じいでたちで東大の教室に出入していた姿に見おぼえがあり、京大へ来てはじめて名を知るに至つた。彼も亦私と同じように転学した一人で吉町義雄といい、卒業後、九州帝国大学文学部で言語学を講ずることになったが、学生の時はいつも教壇の直前に坐つて講義を謹聴していた。

同級生には荻原耐、佐藤通次、西沢静雄、岡本修助、野沢仁三郎がいた。

荻原耐は音楽をたしなみ、通学には和服と袴といういでたちであつたが、マンドリン演奏会に出演する時だけは学生服を着て舞台に出た。彼は私に反して青年らしい活氣にあふれ、じつと静止していることに耐えられないらしく絶えず活動していた。後日「饗宴」を発行する時に、私と一緒に寄稿者の家を訪ねたり、印刷所へ駆けつけたりして倦むことなく、同誌の発行には骨身惜しまずはたらいた。荻原は故人となつたので彼の事を少し記しておきたい。教師たる資格にはいくつかの要素が考えられるであらうが、教壇に立つて坐っている生徒や学生の顔を見渡すことが出来ない教師はまさきに失格するであらう。私にはそいつが出来なかつた。今もつてよく眺めることが不得手である。先日荻原からドイツ語を教えられたという大阪高等学校出身の丁教授から、荻原は教壇から生徒の方をけつて見なかつたという話を聞いて私は私の耳をうたがつた。もしそれが本当のことだとすれば、彼ははどうしてそうしたのであらうか。その理由は私と同じように、はにかみ、人みしり、臆病さ、恐れというような氣分に圧服された結果なのであらうか。それとも彼の精神は氣高くて生徒などを眼中におかなかつたからであらうか。彼は大阪高等学校教授を辞して同志社へ移つたのちに間もなくそこを退いて映画界へ入り、

東京蒲田の松竹撮影所で助監督をつとめた。そして小野松二の編集していた文学雑誌に戯曲を書きつづけて詩神への忠節を守った。彼は第二次世界戦争の末期に映画制作のためにフィリピンへ赴いたまま消息を絶ったが、私は当時のくわしいことを知る由がない。彼の魂魄は、夫人と遺子との住む故国日本へ帰ったろうが、彼の骨はフィリピンの土か、それとも海の底かで朽ちてゆく。

西沢静雄は現在橋本関雪画伯のえがいたふすまの入った屋敷の中で住んでいるが、テースが好きで、かつたくみであった。私どもの中で彼は学資が一番ゆたかであった。彼は多弁ではないが、よく話し、又中庸の道をえらんで、おうような学生々活を楽しんでいるようだった。

佐藤通次の学生時代の姿を思い出せば、私には才気煥発の青年として現れて来る。彼はドイツ語が好きで、又フランス語やラテン語にも長じ、ピアノを練習し、謡曲を稽古した。快活に話し、あいそもよくて、とうてい山形生れの東北人とは思えなかった。酔わなくとも生国のおばこぶしを高らかに歌い、かつそれをドイツ語で訳しても歌った。彼は勤勉な優等生という印象を人に与えた。彼の著作は多数あるが、白水社発行の「独和言林」は戦後改訂を経て名声が高い。

岡本修助は在学中にすでに大阪市内の学校の語学の先生をつとめていたらしいが、世故たけた紳士という風貌があった。

野沢仁三郎は謹直であり、欠席することがなかった。彼は俗事に心を煩わされることなく悠然として学び、名利を追わずとの印象を受けた。後に私は十年間以上も大阪女子高等医学専門学校において同僚として交誼を深めることが出来た。

藤代禎輔先生は私の在学中は病氣のために養生される日が多くなったが、先生の文学概論の講義は相当長く行

なわれた。私が卒業後台北へ赴任するためにおわかれの挨拶を述べにうかがった時に、先生はパイプを片手に私にたいし、「君の給料は植民地だから内地のそれよりも極めて多額である。君が将来内地へ帰りたいたいと思うならば、りっぱな研究を書かないでは不可能だと心得よ。」と教えられたことは未だに耳の中に残って忘れられない。先生の御逝去の報せは台北で受けたが、戦後智積院墓地内の先生のお墓には毎年御命日の前後に在洛の門下の有志（その数は少ない）が参詣する習いとなって今日まで十年以上つづいている。戦争中の紛乱のため当時の京大独文学門下生の寄進した石灯籠の二基のうち一つは失なわれてどっかへいつてしまった。御命日は四月十八日であるから、智積院の庭のおくれ咲くさくらの花びらがいつも小径にはらはらと落ちこぼれ、詣でる人も守る人も稀かと思われる大きい鞍馬石の奥津城の中から、眼鏡をかけられた威あって柔和でおわした先生のお顔がほうふつとして私の前に浮んで来る。

私は上述のように四高在学時代に同郷の友人で高等学校に在学した人々を語らって雑誌を作っていたが、大学に入ってから、この雑誌は同人らの友人をも加えて「裸像」と名を改められ、それには中野重治の詩がいくつか発表された。（「裸像」の合本の私有物は先年「中野重治全集」が刊行された時にその編集者から借覧を乞われて用立てたままで、返却されないもので、同誌の内容について今仔細を述べがたい。）「裸像」はいずれにせよ左翼の文学に傾斜してゆくであろうから、歩調を合わすことが出来ず、また私はもう彼等を去って京都に来ていた。私も、すなわちドイツ文学専攻学生一同は、次年に入学した学生武田鉄五郎、阿部六郎などとも結束して、藤代、新村出、成瀬無極、太宰施門、石田憲次、落合太郎の当時の文学部の諸先生の後援を仰いで、「饗宴」という文学雑誌を発行することになった。（さいわい「饗宴」の合本したものが手許に残っているのでそれに依って少しく記しておきたい。）

『饗宴』第一号は大正十四年九月の発行で廃刊するまで毎号八〇ページから一二〇ページの頁数を盛った菊判の雑誌であった。発行所は京文社で、社主橋本信藏さんが経済上の負担を一切引受けられた。編集所は京文社すなわち百万遍近くの橋本さんの自宅に設けられた。橋本さんの資金ははじめから十分豊富なものとは思われなかった。雑誌は彼の予想どおりの売れゆきをあげなかった。最後に橋本さんはどうとう資本がつかたと思われる。そして荻原はじめ私たちが大学を卒業すると共にわずか半カ年の短命を亨けて饗宴のともしばははかなく消えたのであった。

創刊号には園頼三さんの「古典の蒼空」が巻頭を飾り、林久男さんがゲーテやエッカーマンの登場する戯曲「生まるべき哀歌」を書いた。矢野峯人さんは「ワイルド一面観」を、太宰施門さんは「断片」を、成瀬先生は「西京夜話」の第一夜を寄せられた。詩には河盛好藏、山本経の両君の作品があり、荻原耐は「こんなことが」なる短篇小説を書き、西沢静雄はメレジコフスキーのゲーテ論を、私はワイルドの獄中記をそれぞれドイツ文から訳出しかかげた。又海潮音なる一項目を作って海外の劇壇、文壇の現状や消息、新作の紹介などに努めた。

第二号以下の主な執筆者と内容は――死の顔（二場からなる戯曲）、地獄の饗宴（クリンガアのファウスト）、西京夜話（第二夜、第三夜）が成瀬先生のものせられたもの、阿部六郎の野暮な時計師、目の二篇、矢部堯一の柊と砂丘、蟲の二作、門前真一の秋夜歎と夜寒の二つ、武田蓼（武田鉄五郎）のわんびいす、髪などはいずれも短かい小説であり、このほか荻原、西沢、木村春海、小野松二、三溝湊、杉山の小説があり、詩は河盛の作品。山本修二さんは英国現代劇の神秘的傾向とシイ・ケイ・マンロオの戯曲の論説を寄せられ、太宰施門先生にはアソリ・ベルンスタンの近業と古い巴里の二篇、この他新村出先生のゲーテが寄銀杏葉の詩、片山孤村先生の九州から、佐藤の猶太の婚礼歌（論文）などがのっている。

上記の海潮音で紹介又は報告されたドイツ文学、文壇の項には、ドイツ演劇便り、ドイツ、オーストリア諸大
学文科講義題目抄（1924～1925）、ハーラー・ミューラーの追憶、ヴィーンの女流文士 Alice Schalek 作「並列の
国日本」、リリエンクローンの愛の書簡集、ハウプトマンの新曲「フェーランド」、トーマス・マンの第五十回誕
辰などがある。

この最後の「マンの第五十回誕辰」は副題で本題は「目から手へ」となっている五頁を越える精緻をきわめる
マンの批評であるが、その文末にはAMT生の署名がある。これこそ恩師藤代禎輔先生の筆名であり、おそらく
先生の絶筆の一篇であろうか。

また同欄にフランスの小説界、パリの噂、モーパサンの空中飛行、アナートル・フランスと現代作家、マルセ
ル・ブレボオの新作、La Saison 1924～25、同じく1925～26の諸篇の文尾の署名はSD生となっているが、こ
れは太宰施門先生の筆になるものであった。

ここまで書きおよんで疑問が生じた。私蔵の「饗宴」の合本は六冊分であるが、同誌の終刊は第六冊で終った
のではなく、大正十五年三月号なるものが発行されたらしい、すなわち第七号でもって廃刊となったのではある
まいか。私の記憶はいまいで心細いものではあるが、石田憲次先生からハリウッドの旅信をいただいて掲げた
記憶があり、英文科在学の川崎長の小説ものったはずであり、私自身も比較的長い小説（？）を今一つ発表した
ように思う。それらを収録した一冊がおそらく第七号にあたるのでなかろうか（この点は後日調べて補正するこ
とにしよう）。

一九二六年（大正十五年）の春私たちは京大を卒業して佐藤は九州帝国大学へ、西沢は姫路高等学校へ、荻原
は大阪高等学校へとそれぞれ奉職がきまり、私も台北高等学校の教師をつとめることになって、同年四月はじめ、

神戸港を出帆するキールン港行きの汽船のキャビンの中にはじめて船旅をする自分を見出した。船は神戸を出てから門司沖に半日も停泊するのであったが、いよいよ内地の山と川ともしばらく見おさめとなるのかと思えば、別離のかなしさのため、まだ学生服を着ていた私の胸はいっぱいになると共に、心が千々に乱れるのであった。門司には、京都に遊学している間に私と親しくなったある少女の、短かい私との交際をたつて人妻となった人の家庭がどこかにあるはずであったから。その新居のところも私は知るよしもなかった。そしておそらく彼女と再会する時もうなかるう。

台北高等学校では一九三〇年（昭和五年）秋に全校ストが起り、その余波を受けて十月退職して私は京都に戻った。（私には身のふりかたについては成瀬先生のお力にすぎるより途がなかった、そしてこの時も、又将来においても私の就職は——従って私の生活と私の家族のそれとを保持できたのは、先生の御恩によるのであった。）昭和六年から昭和十六年まで大阪女子高等医学専門学校（関西医科大学の前身）につとめ、一九四一年（昭和十六年）四月から第三高等学校へ移り、一九四九年（昭和二十四年）には京都大学分校助教授となり、分校は今日の教養部と改まって私はこの三月に停年退職の期日を迎えることになった。

一九三三年（昭和八年）二月から三八年（昭和十三年）六月に至る約六年間、京都大学文学部文学科独文科出身の卒業生たちの有志の手で、「カスターニエン」DIE KASTANIENとぅう、主としてドイツ文学の研究、紹介を目的とした雑誌を発行したのであるが、この仕事の最初のころは私も少しばかり関係した。

その頃京大独文科卒業生の数は年々増加して優秀な新人が多く世に出て京都に住む人々も多くなった。この人々の間から上述の雑誌刊行の議が起って、古松貞一、大山定一、和田洋一、板倉軯音、石川敬三（當時は伊中敬三と云った）、若林光夫の諸君が熱心な協力を誓い合った。この企画に武田鉄五郎君や私も参加したが、折よく

京都下鴨の賛精社の主人と知り合う機会を得、同氏から經濟上の後援を受けることとなり、この計画が大した障害もなく実現した次第であつた。その頃東大独逸文学研究会からは「エルンテ」、慶応大学独文科関係では「ブルンネン」などのドイツ文学研究雑誌も刊行されておつて、これらの諸誌の活動は私たちににほひのかの刺戟を与へつつあつた。成瀬無極、雪山俊夫、落合太郎の三先生を顧問に仰いで、数人の幹事で会務を司どり、年四回雑誌を發行して會員に配布する、所定の会費を納める人はすべて會員たる資格を持つこととなるとの規約を定めて京大独逸文学研究会が成立した。會員をつくるための声明は同誌に次のごとく述べられた——近來ドイツ文学があまりにも「ドイツ文学的方法」で研究され、哲學的思弁と演繹的乾燥に陥ってしまった弊をおもひ、我々は文学の立場（それはある意味で、ひろく日本文学の立場）から新しくドイツ文学に肉薄する心組みをもつてこの会をつくりました——

その第一冊は大山定一君が編集を主宰し、誌面を研究と評論、作品（ドイツ作家の作品の翻訳）、AVUS（ドイツ文学作品、作家の紹介や批評、隨筆などを盛る）に分ち、最後に編集後記を加えた。雑誌の大きさは、たて210センチ、よゝい116センチ、手ざわり柔かく厚みのあるラフ紙を使用し、頁数九〇ページ。清新な体裁だけでも世人の注目を引くに十分であつた。

第一冊から第四冊までの執筆者には、加藤一郎、山本真策（故人）、古松貞一、伊中敬三、羽白幸雄、武田鉄五郎、吉田次郎、仁科武光、大淵真雄、玉林憲義の諸君があり、翻訳されたものには、ケストナアの詩と小説、アンナ・ゼーゲルス、リンゲルナツ、カフカ、マリイルイーゼ・フライサ、ワゲルル、ロオベルト・ノイマン、ツックマイエル、ケルレル、リルケの作品があり、コルフの浪漫主義の本質の訳がある。

雪山先生はブリンヒルト歌謡の北方への展開を、成瀬先生は人間癡視と人間描写を、大山君は「三文オペラ」

その他、ゲーテの自然感情についてを書いた、どれも論説である。この他に和田洋一君がヘッセを、大城功君がブルックナーの戯曲について、本野亨一君がゲーテ、武田昌一君がリルケを論じている。

「カスターニエン」第五冊（昭和九年四月）からは第四冊までの清雅な紙型を改めて、その頃最もひろく行なわれていた菊判型の雑誌にあらたまると共に、編集者は大山君から板倉輅音君の手に代った。又第六冊からは発行所は贊精社のほかに東京神田の尚文堂が加った。同店はその頃岩波書店の隣にあって三修社の前社長橋三雄さんが支配人をつとめていた。大山君が上京して法政大学に勤務されることになると共に、尚文堂と私たちが結びつく関係が生じた。この頃から「カスターニエン」の発行費用の一部分は尚文堂の負担するところとなって同店出版物の広告が「カスターニエン」にのせられることになった。

第五冊から第十九冊（昭和九年から昭和十二年一月まで）までの間ドイツ文学作品その他の翻訳されたものは、シュミットボン、ハインリヒ・マン、ケステン、ヤコブセン、グンドルフ、カロツサ、リンゲルナツ、クライスト、クラブント、マンの小説「混乱と幼時の悩み」（板倉君の全訳）、「大公殿下」（アルブレヒト二世まで、七回連載、武田昌一、吉田次郎共訳）、クラウスマン、リルケの小説、ケルレル、E・T・A・ホフマン、ワゲルル、ルカッチ、キツシュ、ケストナア、デーメル、ヴェルフェル、ハウスマン、フォイヒトワングア、ヘッセ、カフカの変貌（本野訳、未完）等々である。

執筆者には前述の諸君の他にあらたに神保光太郎、若林光夫、阿部六郎、矢部堯一、斉木健造（鷹田久規君のペンネームならん）の諸君の名が見え、さらに内山貞三郎、臼井竹次郎、田川基三、真鍋良一、佐藤通次、中井正一、新村猛、甘粕石介、辻部政太郎、真下信一の他に、中川清三、高安国世、山村四郎、大橋四郎、南順三の諸君の活動が見られる。

武田昌一君はリルケの「或る若き詩人に送れる手紙」を五回にわたって訳出し、板倉君はケストナーやリンゲルナツの詩の翻訳をつづけていたが、両君の努力のあとは後日それぞれ単行本となって愛読されたし又愛読されている。

第十五冊（昭和十一年二月）と第十六冊（同年五月）とは成瀬先生の自叙伝「五十歳の男」の序の巻がのつた。それに次ぐ春の巻は第十八冊（同年十月）に、春の巻その二は第十九冊（昭和十二年一月）に書きつづけられた。「五十歳の男」はきわめて長大な自伝ふうの創作となるべき構想のもとで、書きはじめられたものであって、先生のこれに対する熱意と愛着とはその頃も、又それ以後においても度々お話しのはしばしから承ったものであった。しかし、その頃から日本全土をおそいかかった開戦体制の圧迫は、「五十歳の男」の完成を許さなかったし、六十歳の男はただ先生の脳裏に動きつづけて、ついに生れるよしもなかった。しかし先生は昭和三十二年御年七十四歳の夏に「或る詩的遺書」として三幕から成る戯曲「七十歳の男」を書き上げられ、そしてこの遺書完成を見て御満足なされたのであろうか、翌三十三年一月のはじめに逝去されたのであった。

「カスタニエン」の全部は、石川敬三君が所蔵されており、発行所がおかれた和田洋一、若林光夫の両君と、編集を担当した大山、板倉、白井竹次郎の諸君とは、それぞれ健在して活躍しているので「カスタニエン」についてはこれらの諸君から後日又述べられる機会があろう。

（同誌の装幀、表紙の図案は第一冊から第四冊までは吹田草牧画伯、第五冊から第七冊までは本野精吾氏をわずらわし、第八冊から第十二冊までは宮英子画伯の手になり、宮氏はさらに十三冊から第十八冊に至るまで画稿を改新した。第十九冊の表紙は別人の作に改まったが何人の構想によるものか私は知らない。改巻「カスターエン」の表紙は六冊とも同じ図案であるが、これも誰の作であるかを私は知らない）。

一九三七年（昭和十二年）七月から三八年（昭和十三年）六月まで、「カスターニエン」は従来の沈滞を破り革新の気運を盛るために改巻となり、臼井君が編集人を退いて、大山君がこれに代り、改巻第一号から第六号の六冊を刊行して終刊となった。この頃は私は伏見の方へ転居しており、当時の事情についてはよく知らない。

しかし昭和十六年十二月には日本が太平洋戦争を始めたのであったから、十二、三年頃からは、世情の緊迫、文化の統制など、軍部と政府との重圧は、我々の精神と物質両面の生活に強い威力を及ぼしつつあった。「カスターニエン」も又この影響のもとで廃滅の運命をたどったのであろう。第十三冊（昭和十年十月）から第十八冊（昭和十一年十月）までの各号に「故国を逐はれた作家達」を連載して、ナチス政府のドイツを亡命したトラーヤマンその他の苦難を受けつつある人々の運命と活動とを書いた和田洋一君は、この記事が直接の原因となつたわけではなからうが、もっとも痛切な長い々々忍苦の生活を強制させられたのであった。それ以前には大山君も又不当な災難を受けたことがあった。

「改巻カスターニエン」で活動した人々のうち、大山君は、方法と決意、芸術の街、捨身の激情、ゲーテ雑記などを書き、高安国世君は、幼児の花びらとトーマス・マン、薄暮抒情を書き、リルケの或る出会、体験、最後の人々を訳し、谷友幸君は、ハンス・カロツサの場合、ヴェルフエル門とを書き、リルケの風景画論を訳出した。本野君はカフカの変貌、宣告を訳し、板倉君はカロツサ、ホーフマンスタールの訳詩をかかげた他、矢部堯一君はケステンの作品二つを訳した。以上の諸君のほかに、和田、神保、田中克己、真鍋良一、臼井、若林、吉田次郎、水野七郎、安藤康雄、岡田豊、石川敬三の諸君の寄稿があった。

上にも述べたが、大山君は昭和九年四月に京都から上京して法政大学でドイツ語を教えることになり、同僚関口存男氏を通じて尚文堂を知ることになった。尚文堂ではドイツ語文庫をはじめ独文評論と題したDEUTSCHE

RUNDSCHAU というドイツ語学習雑誌などを出版していたところから、独和小辞典の刊行をくわだてて、大山君に計画を話してその意見をたずねた。大山君から辞書を作るつもりはないか、どうかと私にあてて手紙がとどいて、私はその申し出を承諾し、和田君と板倉君との協力を得て、辞書の編集に着手した。この仕事は完成時間の制限があったために、原稿の作成と校正とに追われて、文字通り寝食を忘れる努力を注ぐことになった。特に校正を行うために印刷所の所在に近い市ヶ谷加賀町のある家の二階で竈城して、和田、板倉の両君をはじめ、岸江憲一（故人）、薦田久規、臼井竹次郎、武田昌一、吉田次郎の諸君と一緒に一カ月以上に涉って仕事の労苦を分ち合った。そして成瀬先生の序文をいただいて昭和十年六月に発行することができた。上記の諸君のほかに、松島豊三（故人）、田川基三の諸君などの援助をも得た。同書は「標音独和新辞典」（編者は板倉、和田、杉山）と云いページ数六百五十二頁、その特色のひとつは単語の発音に片仮名の標音をも採用した点であった。刊行後、ひきつづき緩慢ながらも売行は絶えなかった。するうちに尚文堂は廃店して、橋三雄さんがあらたに三修社という新しい出版書店を作ると共に、辞書の発行は三修社にひきつがれた。橋さんは原版を田舎に疎開しておいたために、戦禍による焼失をまぬがれたので、戦後、ただちに同書の発行を行って書店の復興につとめた。

戦後の我が国の学制の改革もさいわいして三修社はしだいに堅実な発展をとげ、昭和三十三年三月には、同書の徹底的改訂を行い「標音独和」と名を改めて発行し、今日に至った。「標音独和」はページ数九百四十一頁に達し、内容は全くあらたまり、私どもが前書の刊行以来絶えず改修を志しながら準備をつづけていた構想と工夫とを盛ったから、なにほどの便益をドイツ語学習の人々に与えていると信ずる。都合により和田君は編者を辞されたので、板倉、杉山のふたりの編者となっているが、和田君にも長いあいだ協力を仰いだのであり、特に天理大学ドイツ語研究室の三好成美君の献身的な援助を受けた。昭和三十二年七月から私はこれらの諸君とともに

浅間山のふもと、御代田町の一旅館に滞在し、原稿の作成と校正との仕事のために、ふたたび寝食を忘れる勞苦を一カ月以上もつづけたのであったが、さいわいにもその後大いに健康をそこねるに至らず、反ってその夏の苦しかった生活をしのんで、今日では楽しい思い出が浮ぶのである。

大いに健康をそこねるに至らずと述べたがその後私は、胃カイヨウをわずらって二度も病院での養生生活を送ったから、やはり過勞のむくいは受けたのである。（附言―自著のことを述べすぎたかと思うが、小さい著作にも多数の友人の協力があったことを知ってもらいたく、又それらの人々に謝意を表したいためにほかならない）。

最後に成瀬先生が、雪山、ユーバァシヤール両先生と御一緒に、朝日新聞社長上野精一氏の援助を得て創立された「日本ゲーテ協会」のことを述べておく。「日本ゲーテ協会」は会長に青木昌吉氏をいただいて一九三一年（昭和六年五月）に、京都の都ホテルで発会式をあげて誕生を祝ったが、毎年の秋ごとに京都で総会を開いたほか、毎年一冊ずつ「ゲーテ年鑑」を発行した（年鑑の印刷発行の事務は南江堂書店が引受けてくれた）。私は発会式の準備をはじめ、年鑑編集の事務を数年間おてつだいしたが、後にはその役は石川敬三君、田川基三君が果されることとなった。そして昭和十八年五月にゲーテ年鑑第十一巻を刊行したのを最後に、総会も開かれず、会の活動も休止して、戦争の終結を迎えたが、成瀬先生がさまざまな戦時中と戦後の難儀をなめられた末に京都から東京へと住み移られ慶応大学文学部に出講されるに及んで、協会の本部は京都から東京の慶応大学文学部内へ移ることとなった。今日の「日本ゲーテ協会」の前身がすなわちこれである。

私のこの文章の題を私は「わが半生」と題した。よわい六十年を超えその生涯のあらましを述べた文章にわが半生と題しては、おまえはさらにあと五、六十年の後生をむさぼらんとするつもりなのか、との詰問を受けそうに思う。然らず、もとより私は長寿を願わないが、凡庸な私は京都大学退職を期として、これまでの六十余年の

生涯を前半の一生（私はトンチンカンなことばかりをしかしてお茶を濁した半生を生きて来たことを今痛感しているのだが）と見なし、今後何年間生きながらえるか、もとより知るべくもないけれども、かりに三年間なお生きるとしてその三年間を、私のあとの半生とみなして悔いと恥の少い生涯を送りたいと願いつつある私の心もちによったのである。読者こいねがわくは諒されよ。